

地球生きもののいのちのつながり

Chapter 1 (生物の多様性とは)

N：生き物の歴史は目に見えない小さな微生物から始まり、植物や昆虫そして大きな恐竜やマンモスなどの動物へと進化してきました。そして動物も植物もさらに色々な形や種類に別れ、それぞれが森や海、砂漠や山の上や田んぼの中など、いろんところで生きています。そして今この瞬間も生命が生まれ、育ち、一刻も止まることなく活動しています。このような命のつながりを「生物多様性」といいます。耳慣れない言葉かもしれませんが、これは私たちを取り巻く自然環境や生き物全てのことを現しています。

その生物の多様性が失われるようなことになったら、様々な動物、植物、そして目に見えないミクロの世界の生き物たちが生きていけなくなったら、もし生き物が住む海や山、草原や湿原が壊れたりしたら、命のつながりが途切れてしまいます。そのつながりの中にある私たち人類の命も危機に立たされるでしょう。つまり、私たち人間は地球上に生きるあらゆる命のつながりによって、生かされているのです。それにしても不思議だと思いませんか。「命」というもの。一体、いつ、どこで、どんな風にして生まれたのでしょうか。

Chapter 2 (生命誕生と多様化の歴史)

N：地球は今からおよそ46億年前に誕生しました。誕生から数億年の間、それはどんな生き物も存在しない星でした。地球の周りは、水蒸気や二酸化炭素で覆われていました。5億年ほどして、地球の表面が冷えてくると、まわりの水蒸気が水のようなものになって集まり、やがて海ができました。この海こそが生命誕生の舞台です。生物のいなかった海に誕生した生命とは、一体どんなものだったのでしょうか。およそ27億年前に出現したシアノバクテリア、もっとも原始的な生き物のひとつです。単細胞が糸や数珠のように繋がっており、その細胞の中にある葉緑素が光合成を行って酸素を作り出したのです。

オーストラリアのシャーク湾。シアノバクテリアの当時の姿がここでは今も見られます。ストロマトライト、マッシュルームのような形のこの岩はギリシャ語で「岩のベッド」という意味ですが、実は何千年も前からのシアノバクテリアが固まったものです。まわりのブヨブヨした部分は、5ミクロンほどの生きたシアノバクテリアです。シアノバクテリアは太陽のエネルギーを使ってどんどん増殖することができ、その際に水を分解し、酸素を発生させます。

生命が誕生してからおよそ36億年から40億年にわたる生物の進化の歴史を1年に見た

立てたカレンダーです。最初の生命が生まれたときを1月1日とすると、4月頃にシアロバクテリアが大量発生し、酸素を作り出しました。海の中で突然、爆発的な進化が起きたのは、11月のこと。およそ5億4千万年前です。多細胞化を経て遺伝子は急速に多様化し、大きさも形も様々な生き物たちが現れます。アノマノカリスや三葉虫、そしてハルキゲニアなどがその例です。海はこのような生き物たちの生存競争の場となりました。その後、地球を覆うオゾン層ができると、太陽からの有害な紫外線が遮断されたおかげで、海から陸に上がってくる生物が現れました。12月9日、恐竜の誕生。追って、哺乳類も出現します。人類の誕生は大晦日、12月31日の昼の12時。そして現代人の祖先、ホモサピエンスが現れたのは、除夜の鐘が鳴り出した夜11時半のことだったのです。生命誕生から今に至るまで、40億年の歴史の中でまず私たちの生活する環境を整えてくれたもの、それがミクロの世界の生き物でした。

Chapter 3 (生きものたちのつながり)

N：アフリカの大自然の中では様々な動物たちの見事な命の輪が見られます。キリンのような専ら植物を食べる草食動物がいるかと思えば、その草食動物を餌とする肉食動物もいます。肉食動物の食べ残しにも、ハイエナやジャッカルが群がります。そして最後にやってくるハゲワシ、このようにして全ての命が繋がっているんですね。動物の糞には植物の種も混じっています。そのおかげで自分では移動できない植物も遠くに種を撒いてもらうことができます。糞はまた昆虫の栄養にもなり、産卵の場所にもなっています。このような繋がりの例は、もちろん日本にも見られます。

日本は国土の3分の2が森林という世界で数少ない豊かな森のある国です。その森には様々な野生の動物たちが住んでいますが、その中でもとりわけ森と密接な関係を持つのがツキノワグマです。元々、大型肉食動物ですが、日本の自然に適応したツキノワグマは植物の種や木の皮なども食べるようになりました。このツキノワグマの食べ物の変化は森の方へも大きな変化をもたらしていました。

山崎晃司(茨城県自然博物館)：熊は元々は食肉類ですので、植物を食べたときに全部消化できないんですね。たくさん糞をするんですけれども、そういうものをイノシシだったりですとか、それから小さいネズミ類だったりとか、そういうものがまた利用して、熊っていうのは体が大きいんですよね。で、一度にたくさんの食べ物を食べられる、しかも遠くへ

移動する能力を持っているということで、例えば木の実を食べたとして、その種をですね、大量にしかも遠くへ運ぶ、だから森の再生にももしかしたら大きく関わっているんじゃないかということが最近わかってきたんです。

N：日本はまた、豊かな海に恵まれた国でもあります。日本の海は、北は流氷のオホーツク海から、南はさんご礁の東シナ海まで、まず海という環境そのものにも多様性があります。そして日本列島は暖流と寒流がぶつかる場所にあるため、集まってくる海の生き物も多種多様です。小さなプランクトンからそれを食べる魚、またその魚を食べるイカ、さらにそれを飲み込む鯨まで、それぞれが影響しあいながら生きています。海の中で生きる知恵、それはなんといっても食べられないようにすることです。ではその有名な例を見てみましょう。

アニメのあのファインディングニモでおなじみのあの魚です。実際のところはどんな魚なのでしょう。

奥野淳兒（千葉県立中央博物館）：ふつうはイソギンチャクに触れると、他の動物も刺されるという状況になるんですけども、このクマノミの仲間は体に粘液をまとってまして、その毒が効かないんですね。ですから他の生き物に襲われにくいっていうのもありまして、クマノミというのはイソギンチャクを大切なパートナーとして暮らしています。

N：そしてイソギンチャクを身にまとっているヤドカリもいます。これも身を守るための知恵なんですね。イソギンチャクの中で暮らす生き物の中に、「アカホシカクレエビ」という小さなエビがいます。このエビは独特な動きをして魚に合図を送ります。ハサミを左右に振って、ダンスをするんです。これは「クリーニングダンス」というお掃除の合図のダンスですが、『掃除に来たんだから食べないで』というメッセージにもなっています。これを見た魚の方はヒレを寝かせて、『じゃあ、掃除を頼む』という姿勢。そこでエビは魚に飛び乗って、お掃除開始。魚の背についた寄生虫をひとつひとつ食べて掃除します。仕事が終われば、イソギンチャクの我が家へ。このような関係を「掃除共生」といいます。生き物たちは様々な環境で互いに見事なつながりを持ち、支えあって生きている地球、まさに生物多様性の賜物です。

Chapter 4 (脅かされる生物多様性)

N：地球上には今、生物多様性を脅かす存在が続々と現れています。残念なことにその多くが人間が原因となっています。産業の発展のための急速な工業化、便利な生活のための都市化、そして土地を開発しすぎたり、森や草原の手入れを怠ったり、さらには天然資源の取り過ぎ、化学物質による遺伝子のかく乱、このような人間の行為によって今、生物の多様性は失われつつあります。生き物のつながりが途絶えると、地球にどのような影響を及ぼすか、科学者にもまだ解明できていません。落とし穴がどこにあるかわからない、それが生物の多様性が失われることの本当の恐ろしさなのです。

最近、急速に進む地球温暖化が生物多様性を損なう大きな原因となっています。これによって21世紀の末までに現存する動植物の2割から3割以上が絶滅する、と予測する専門家もいます。

N：氷の世界、北極圏に住むホッキョクグマは地球温暖化によって既に深刻な影響を受けています。ホッキョクグマは氷に乗って食料のアザラシを捕りに行きますが、氷が少なくなるとそれができません。おなかを空かせたホッキョクグマは食べ物を求めてさまよい、ついに、人里にやってくるようになりました。人が捨てるゴミをあさって食べるのです。ホッキョクグマは必死です。その白い毛はゴミを焼く炎に炙られて、焦げて茶色になっていました。

N：温暖化の影響は遠い北の国に限らず、私たちの住む町の中にもたくさん見られます。そのひとつが東京の都心に生えるシュロの木。東京文京区にあるこの植物園では、人が植えたり、育てたりしていないのに、自然に生え、成長しているシュロの木がたくさん見られます。元々、九州に樹生していたシュロが東京に姿を現したのは、今から半世紀ほど前のことでした。シュロは気温の上がったことによって早速北に移動してきた、いわば足の速い植物です。でも多くの植物は温度や湿度、土の質や他の生き物との関わりの中で生きているので、簡単に移動することはできません。そんな中にシュロのような植物が現れると長い時間をかけて作られた、安定した生態系に深い影響を与えることになるのです。

N：生物が多様な状態を保てなくなる現象をもたらす地球温暖化、その例としてよく知られているのがサンゴです。サンゴが集まってできたサンゴ礁は、海の中で防波堤となるので、そのまわりは波が穏やかです。またサンゴの隙間は、小さな生き物の隠れ場所にぴっ

たりで、それらを食べるために大きな生き物も集まってきます。そしてサンゴの石灰分のおかげでまわりの砂浜には特有の植物が育ち、その植物を求める生き物も暮らしています。このようにサンゴは海や海辺の生物の多様性を大きく支える重要な存在です。ところが温暖化で海水の温度が上がったことにより、サンゴには「白化(はっか)」という致命的な現象が起っています。サンゴの中には「褐虫藻(かちゅうそう)」という藻が共生しています。褐虫藻は光合成を行ってサンゴに酸素と栄養を与えていますが、水温が上がると褐虫藻がサンゴから抜け出したり、死滅したりします。これが白化という状態で、褐虫藻から栄養がもらえなくなったサンゴはやがて死滅するのです。このままの勢いで海水温の上昇が進むと、2050年までに全ての海からサンゴが失われるとさえ言われています。このような絶滅の危機が問題となっているのは、サンゴだけではありません。

これまでにほ乳類のうち79種が既に絶滅し、さらに現在ほ乳類の21%、鳥類の12%、は虫類の28%、両生類の30%、淡水魚の37%が絶滅の危機に瀕しているのです。現在地球上では、1日に100種もの生物が絶滅しつつあり、この勢いは自然がもたらす絶滅の早さの1000倍にあたると言われています。

厳密には、温暖化だけであれば高緯度地域に逃げられるところ、高緯度地域からは海洋酸性化(大気中のCO₂の増加によって引き起こされる)の影響が出てくるために、挟み撃ちにあい、サンゴの生息域に大きな影響を与えています。

参考資料

地球温暖化と海洋酸性化が日本近海のサンゴ分布に及ぼす影響の予測に初めて成功

<http://www.nies.go.jp/whatsnew/2013/20130109/20130109.html>

サンゴ礁の恵み

サンゴ礁には様々な形をしたサンゴが、色とりどりの魚たちや貝などにすみかを与え、生活を支えています。私たち人間にとっても、食料となる魚を与えてくれたり、ダイビングやシュノーケリングで目を楽しませてくれる大切な存在であり、豊かな文化の源ともいえます。また、サンゴ礁という地形は、外洋から打ち寄せる激しい波から島の人々の生活を守る役目も果たしています。

漁業資源

サンゴ礁には多くの魚や貝類が住んでいます。地元の人たちは昔からこれらの貴重な海の幸を大切な食料として利用してきました。

自然の防波堤

島の周囲に広がるサンゴ礁は、外洋から打ち寄せる激しい波を食い止め島に住む人や生物多様性を見守っています。2004年のインド洋津波の際には、サンゴ礁が良い状態で残っていた地域で被害が大幅に少なかったと報告されています。

生物多様性

サンゴ礁には枝状やテーブル状、塊状など様々な種類のサンゴが生息し、その間に複雑な生活空間を作り出しています。そのため、魚や貝をはじめ、多くの生物たちが集まり、熱帯雨林に匹敵するほど多様性が高い生態系をもつといわれています。

サンゴ礁の経済的価値

サンゴ礁の様々な恵みを経済的に評価する試みがなされています。漁業や観光業を支えている価値や防災機能の価値などをお金に換算します。国連環境計画（UNEP）の最近の試算によると、サンゴ礁1平方kmが1年あたりに生み出す経済的価値は、10万ドル～60万ドル（約1,200万円～7,200万円）と見積もられています。この見積もりを使うと、沖縄本島周辺の浅い海（礁池）だけでも約70平方kmあるので、約8.4～50.4億円の価値があると計算できます。

観光資源

サンゴ礁を泳ぐ、色とりどりの魚たち、海藻の間に隠れている美しいウミウシなど、ダイバーにとってサンゴ礁は宝の山。観光の目玉として、重要な資源です。

教育の場

浅い海に様々な生き物がすむサンゴ礁は、学習や研究の格好の場です。自然を実際に体で感じながら、その仕組みを考える環境学習の場としても利用できます。また、いろいろな大学や研究所などが貴重な研究を行っています。

サンゴ礁生態系

サンゴは枝のような形やテーブル状や塊状など様々な形になります。その間にできる空間の大きさや形に合わせて魚や貝類など多くの生き物がすんでおり、周辺には、それらを餌とする大きな魚やエビなどが集まります。また、サンゴの出す粘液を食べるものやサンゴをかじる魚もたくさ

ん見られます。このように、海の中でサンゴを中心に、お互いに利用しながら生活している生きものたちの世界を「サンゴ礁生態系」といいます。

サンゴ礁の基礎知識

サンゴは動かないけれど動物です。イソギンチャクに近い仲間で、口の周りにある触手を使って近づいてくるプランクトンを捕まえて食べます。また、体の中に住む「褐虫藻(かっちゅうそう)」が光合成によって作る栄養も利用しているので、光合成に必要な光を十分得るよう、浅くて明るい海に住み、光を求めて木の枝のように伸びるなど、植物のような性質を持っているのも大きな特徴です。

サンゴは動物

サンゴは上向きに口を開いた袋のような、簡単な体の構造をしています。食べ物を食べる口とそれに続く消化器官(胃腔)で出来ており、食べ物も排泄物も口から出し入れします。口の周りには触手と呼ばれる手のような器官を持ち、プランクトンを捕まえて口に運びます。これらの体の下には石灰質で出来た骨(骨格)があるため、手で触ると石のように硬く感じます。

この「口 触手 胃腔 骨格」はサンゴの体を構成する基本単位であり、「ポリプ」と呼ばれます。多くのサンゴでは、このポリプがたくさん集まって繋がった「群体」というかたちで生活しています。

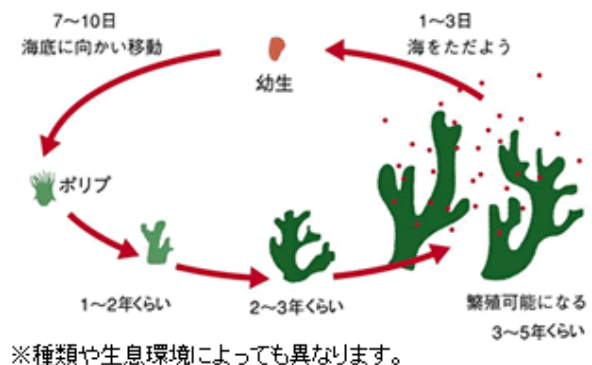
サンゴの植物的性質

サンゴの体の中には「褐虫藻」という植物プランクトンがたくさん生きています。一つ一つは直径 1/100 mm というとても小さな生き物ですが、光合成によって作る栄養を渡してサンゴの生活を支えています。サンゴのほうもより多くの光を得て褐虫藻の光合成を助けるために、木の枝のように高く伸びたり、他のサンゴに覆いかぶさったり、陸上の植物と同じような成長の仕方をする。

サンゴの一生

サンゴは動物なので、卵(または子供)を産みます。多くのサンゴは卵と精子を体外に放出(産卵)し、海水中で受精した卵が子供(幼生)になります。幼生は、しばらく海を漂った後、海底に移動して体を固定します。すると、骨格を形成してポリプとなります。ポリプは分裂してどんどん数を増やし、「群体(ぐんたい)」として大きくなっていきます。これを成長といいます。

多くのサンゴは年に1回、一斉に産卵しますが、その時期は種類によって異なります。沖縄で最も普通に見られるミドリイシの仲間は、主に4~6月の満月の頃に産卵します。

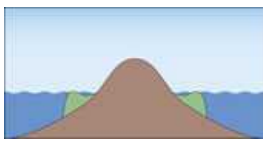


サンゴ礁の分布

サンゴ礁が作る地形である「サンゴ礁」は赤道を中心に北緯 30 度から南緯 30 度までの間に分布します。世界で最も種類が多いのは、インドネシアとフィリピン、パプアニューギニアの 3 つの国に囲まれた海域で、ここは 450 種以上のサンゴが分布します。

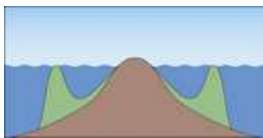
サンゴとサンゴ礁

サンゴが死んだ後、長い時間かかってその石灰質の骨格が積み重なってできる地形を「サンゴ礁」といいます。サンゴの他にもホシスナやゼニイシという有孔虫（ゆうこうちゅう）の仲間や貝など、骨やからを持つ多くの生物がサンゴ礁を作るのに役立っています。サンゴ礁にその形によって大きく 3 つに分類されます。



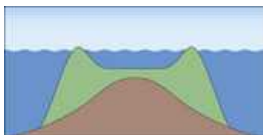
裾礁（きょしょう）

陸地をかこむように海岸に接してサンゴ礁が発達します。東南アジアに多く見られ、日本のサンゴ礁もほとんどがこの形です。



堡礁（ほしょう）

陸地とサンゴ礁の間に深さ 10~80 メートルの「礁湖（しょうこ）」という浅い海を作り、沖合いに発達します。代表的なのはオーストラリアの「グレートバリアリーフ」。陸からサンゴ礁のふちまで 10~100 キロも離れています。



環礁（かんしょう）

中心に陸地がなくサンゴ礁だけがリングのようにつながって海面に出ます。太平洋やインド洋の小さな島々に見られます。高さがとても低いため、海水面が上しようすると、沈んでしまう可能性があります。

Chapter 5 (自然と人との共生・里地里山)

N：田んぼに小川、それを森や林が囲み、さらにその奥に山がそびえる、日本人なら誰でも懐かしさを覚えるのがこんな里山の風景です。でも里山は、ただ懐かしく美しいだけの存在ではありません。それは日本が世界に誇ることができる、素晴らしいエコシステムなのです。里山は日本古来の風景ですが、自然そのままではなく、人間が手を入れて作ったひとつの生態系です。弥生時代の昔から千年以上にも及ぶ稲作の歴史の中で、日本人はこの生態系を上手にコントロールし、様々な手入れをしながら豊かな生物の多様性を保ってきました。

岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館館長）：その生物の多様性というのは元々ある状態を維持すればそれでいいというものじゃなくて、人と共生しながら作り上げられた生物多様性というのは、人とそうやって共生しながら維持していくというのが正しいやり方であって、そういう意味では、私は自然保護よりも人と自然が共生するような環境の創生というのを、環境を作り上げて維持していくというのが人と環境との、自然との付き合い方の基本じゃないかというように思ってますし、それは里山を作り上げてきた私たちのお先祖さまたちが非常に上手に演出してくれてくれたものだと、すごく今日評価しているんですけども。

N：日本の里山では弥生時代から今まで千年もの長い間、ほ乳類の絶滅はほとんど起きていません。この世界的にも驚くべき事実を支えてきたのは日本人の力です。山を守って、身近な山の幸を大事にし、森の手入れを村単位で行い、里には水田や溜池を作ってきたという、弛まぬ努力の賜物なのです。

里地里山って何ですか？

里地里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域を言います。ここでは、人が適切に手を入れることによって成り立った多様な環境（二次的自然地域）がネットワークを形成し、持続的な農林業の営みを通じて、多様な野生動植物が生息・生育する生物多様性が豊かな空間となっています。また、このような里地里山では、長い間人と自然のかかわりを通じて培われた地域固有の景観や食、工芸品、伝統行事などの生活文化も育まれています。その他にも、里地里山の動植物は、人々の身近にあって古くから歌や俳句に詠まれ書画に描かれてきました。「ふるさと」や「春の小川」などの唱歌にうたわれているような身近な里地里山の風景は、日本人が共有する原風景であり、日本の精神文化の基盤にもなっています。

昭和30年代以降、燃料革命や営農形態の変化など経済社会の変化に伴う里地里山の利用の減少、また人口の減少、高齢化の進行に伴う農林業や集落の活力の低下が進む中、耕作放棄地や手入れがなされず放置された二次林が増加しました。こうした変化に伴い、シカ、イノシシ、サルなど中・大型哺乳類の生息域の拡大などにより、人の生活環境や農林業への鳥獣被害が深刻な地域がみられ、ゴミの不法投棄など生物の生息・生育環境を悪化させる問題も起きています。さらにこうした耕作放棄地や手入れの行き届かない森林がみられるようになり、人の営みと自然が調和した伝統的な農山村の景観が失われつつあります。また、竹林や水田の減少などにより、水源の慣用や土砂流出の防止など里地里山の国土保全機能の低下も懸念されており、放置された里地里山は防災上も問題を抱えています。

こうした状況の中、生物多様性の保全や地球温暖化の問題がクローズアップされ、人と自然が共生した暮らし方、地域資源の循環利用の知恵、心の豊かさを創出する場などの視点から、里地里山が改めて注目されています。

例えば、バイオマス資源の利用技術の発展に伴い、里地里山にストックされている間伐材やススキなどの草木質資源は、新たな経済資源としての活用が期待され、また地域とのふれあいや地域らしさを求める観光への志向の高まりに伴い、里地里山の景観や生活文化はエコツーリズムやグリーンツーリズムの対象として地域活性化の新たな資源として活用されています。さらに、全国的に都市化が進行する一方で、国民の自然とのふれあいの機会が減少し、特に子供たちの自然離れが憂慮される中、多様な生きものや景観、生活文化を有する里地里山は、自然観察などの環境教育・環境学習のみならず、農林業体験、山村生活体験など様々な活動の場として活用されています。

里地里山は生物多様性に必要なの？

里地里山では、多様な生物の生息・生育の場となってきました。また国土の約4割を占める里地里山(図1)は、メダカなどの希少種やトンボ、カエル、カタクリなど様々な生物を育む、生物多様性保全上重要な地域であり、環境省の調査によると絶滅危惧種が集中して生息・生育する地域の5割以上が里地里山に分布しています(図2)。奥山自然地域とともにわが国の生物多様性を支える重要な地域と言えます。

**二次林、農地、草原といった
自然環境が中心の地域である
里地里山は1,500万ha、
国土の4割を占める。**

■ 里地里山の自然環境が優先する2次メッシュ



図1 里地里山の分布

環境省版レッドデータブックに掲載されている種のうち、植物種 5 種以上かつ動物種 5 種以上が生息している地域の 5 割以上が里地里山と重複。

- 里地里山メッシュ
- R D B 集中メッシュ
- R D B 集中里地里山メッシュ

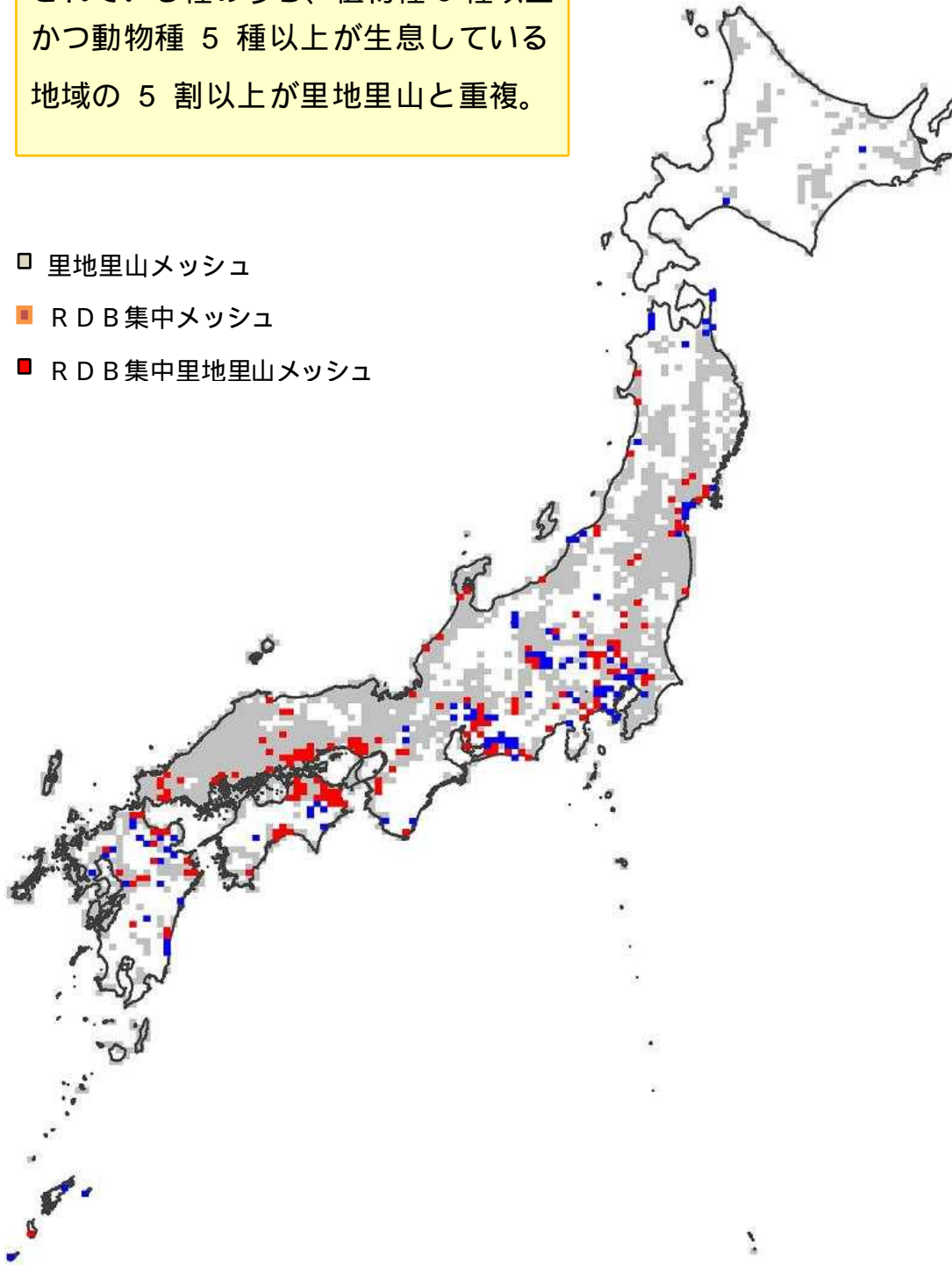


図2 里地里山と希少種の集中分布域の重複状況

里地里山って日本だけのものですか？

二次的自然地域は世界各地にも見られ、気候、地形、文化、社会経済などの条件により、その特徴は異なっています。フィリピンではムヨンやウマ、パヨ、韓国ではマウル、スペインではデヘサ、フランス他地中海諸国ではテロワール、マラウイやザンビアではチテメネという名称で呼ばれています（写真1～3）



写真1 フィリピン



写真2 韓国



写真3 インドネシア

SATOYAMA イニシアティブって何ですか？

わが国の里地里山のように農林水産業などの人間の営みにより長い年月にわたって維持されてきた二次的自然地域は世界中に見られますが、現在はその多くの地域で持続可能な利用形態が失われ、地域の生物多様性に悪影響が生じています。世界で急速に進む生物多様性の損失を止めるためには、保護地域などによって原始的な自然を保護するだけでなく、このような世界各地の二次的自然地域において、自然資源の持続可能な利用を実現することが必要です。

わが国で確立した手法に加えて、世界各地に存在する持続可能な自然資源の利用形態や社会システムを収集・分析し、地域の環境が持つポテンシャルに応じた自然資源の持続可能な管理・利用のための共通理念を構築し、世界各地の自然共生社会の実現に活かしていく取組を「SATOYAMAイニシアティブ」として、さまざまな国際的な場において推進していきます。

自然共生社会の実現を目指すうえでは、何よりも、人間の福利をもたらす多様な生態系サービスに関する理解が不可欠であり、それらの安定的な享受に関する知恵の結集が重要であると考えられます。また、これら生態系サービスを安定的に享受し自然と共生するための伝統的な知識を現代社会に応用していくための検討も重要です。さらに、このような取組を支え、促進していくための、社会的な仕組みを構築していくことも求められます。

SATOYAMAイニシアティブでは、「自然共生社会の実現」という長期目標に向けた道のりとして、「多様な生態系サービスの安定的な享受のための知恵の結集」、「伝統的知識と近代科学の融合」、「新たなコモンズ（共同管理のしくみ）の構築」の3つの行動指針を掲げています。さらに、行動指針に沿ってそれぞれの地域において、持続可能な利用と管理を実践していく際には、「環境容量・自然復元力の範囲内での利用」、「自然環境の循環利用」、「地域の伝統・文化の評価」、「多様な主体の参加と協働」、「地域社会・経済への貢献」の5つの視点が重要と考えられます。

わが国では、国際機関や各国とも連携しながら、COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）のサイドイベントとして「SATOYAMAイニシアティブ」を効果的に推進するための国際的な枠組みとして51の国や各機関の参加を得て「SATOYAMAイニシアティブ国際パートナーシップ（IPSI）」を設立しました。現在105の機関の参加を得ており、情報共有や協力活動の促進による取組の充実を通じ「SATOYAMAイニシアティブ」の一層の推進を図っています。

里地里山への関心及び理解を求めるための情報発信

環境省ホームページ（自然環境局里地里山の保全・活用）<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>

里地里山保全活用行動計画、里地里山保全・活用検討会議、各種パンフレット・映像資料などを掲載

ホームページ「里ナビ」（環境省で里地里山の保全活動の担い手育成を支援することを目的として管理・運営）

<http://www.satonavi.go.jp/>

各地で開催されたシンポジウムや研修会の報告、活動場所及び専門家に関する情報などを掲載するほか、全国の活動事例をデータベース化

Chapter 6 (私たちの暮らしとの関わり)

N：私たちは毎日、多くの恵みをこの地球の生き物から受けています。例えば酸素、これは植物や小さな微生物が毎日作っています。例えばきれいな水、汚れた水をきれいにしてくれるのも水の中の小さな生き物や植物です。私たちが毎日肉や魚を食べられるのも、餌となる自然の中の小さな生き物のおかげです。野菜や果物は蜂や蝶などの昆虫が受粉をしてくれないと実や種ができません。実や種がなければ、次の年には野菜も果物も育たず、もちろん食べることはできません。乗り物を動かす力となっている石油や石炭などの資源は、大昔の生き物たちによる化石燃料なのです。人の病気を治す薬も植物やキノコ、土の中にいるバクテリアなどの生物から作られています。私たち人間は便利な暮らしのために、動物や植物が住んでいるところに道路を作り、ビルを建て、川や海を埋め立ててきました。その結果、今どの時代よりも早いスピードで生き物たちが絶滅しています。そのことによって生態系が壊れ、生物の多様性が失われています。こうした事態が続くと、私たち人間もいずれ絶滅の淵に立たされるでしょう。

生物の多様性について、皆さんがもっと知りたい、守りたい、という思いを世界の人々に伝えることができれば、明日はきっと、もっと、生き物の住みやすい地球になるでしょう。